寄稿

高校数学教師のつぶやき

森住　弘
昭和29年3月学部卒業

1．はじめに

2019年5月1日の朝日が昇った．希望に満ちた令和の夜明けである．この月の21日に私は91歳となった．1928年（昭和3年）戊辰の5月21日の生まれである．60歳の還暦の年が昭和の終り（昭和63年），翌年が平成元年そして平成の終りに90歳となった．誕生の60年前はというと1868年何と戊辰戦争，明治維新の年である．何か日本近代の歴史が身近に感じられる．

私は鳥取県米子市で生まれた．私の家から歩いて30分ほどの処に皆生（かいけ）の海岸がある．温泉町もある．子供の頃からよく遊びに行った．静かな日は海水浴もできた．向かいにはおだやかな伯耆大山（ほうきだいせん）が美しい姿を見せ，白砂青松の眺めもよかった．だが日本海の荒波が押し寄せる日も多かった．私は海岸に立って寄せては返す波の姿を見るのが好きだった．あるときはゆるやかにあるときは激しく寄せては返す波の姿．そしてどんな大きな波でも白いしぶきをあげた後の引きぎわのよさ，いや強さといってもよいのかも知れない．この休みなく寄せる波の姿に私は人生の姿を感じる．

2．大学時代　その1

高校時代（旧制第六高等学校）病気のため2年休学して，昭和26年京都大学理学部数学科に入学した．お陰で旧制，新制多数の友人に恵まれ大変得をしたと思っている．

当時の数学教室の主任教授は小堀憲先生であった．入学当初先生から「これからそれは習っていません」とは絶対に云ってはならない．どんな勉強をしたらよいか，ど

んな本を読んだらよいか，いくらでも相談にのってあげる．しかし「それは習ってはいません」とは絶対に云ってはならないとさとされた．それが学問をする道かと深く印象に残っている．

新任の伊藤清先生の「確率論」の講義はすばらしかった．フリーハンドで定義，レンマ，定理と流れるような内容は芸術作品のようにおもわれた（後に岩波から確率論として出版された）

松本敏三先生はとつとつと解析学の講義をされた．明治時代の風格を感じさせられた.（後に私が高槻ロータリーの会員になったとき，先生のお孫さんの女性にお会いし，おじいちゃんがヨーロッパに留学して，音楽のレコードを沢山買ってきてくれたので私は音楽が好きになったとはなされた.）

秋月先生の代数学は難しかった.「これは簡単なことだというのは，わたしにとってで，君達には難しい」全くその通りであった．隣を見ると，ノートをとらないでウンウンうなづきながら講義をきいている学生がいる．思わずこの所を教えてくれというと，先生の話した通りに教えてくれた．よくわかっているからノートをとる必要もないらしい．とてもついていけないと感服した．

小堀憲先生の「函数論」の講義はとても丁寧でわかりやすかった．しかも皆の興味をさそうように，数学史に残る学者のエピソードなどを話された．私たちが数学史に興味を持つようになったのは先生のお陰である．先生の授業は 9 時から 3 時間連続であった．先生は大変お元気であった．ただ私達は当時の食糧事情で配給制の食糧であったので，ヒル前に北食堂に入って行く学生を窓から見ると少々うらめしかった．

3．大学時代　その２

数学の授業のあい間には教育学部の講義を聞きに行った．教育原理学，教育社会学，教育心理学など下程教授や臼井教授のお話は面白かった．別に専門ではないのでノートもとらず文字通り聴講したのである．折角授業に出席したので前期単位認定試験を受験した．驚いたことに普段 20 人くらいの受講生だったのに，受験した学生の数は 50 人をこえていた．みなプリントなどを一生懸命読んでいる．私は毎回出席していたので感想文のような感じで答案を書いた．これが思わぬことで後で役に立ったことは後述する．

11 月になり風邪ぎみとなり学生診療所で診察を受けたら病気あがりだから無理をしてはいけない．休みなさいと忠告された．当時数学科の試験は 12 月と 2 月の 2 回だけだったので困ったが，食糧事情も悪く，健康にも自信もなかったので郷里に帰り休養することにした．体の調子はさして悪くはなかったが，当地の医師からも休養を命ぜられ，止むなく自宅で休養することになった．お陰で大学 1 回生では数学の単位は何も得られなかった．

4．大学時代　その３

４月になり陽気もよくなったので医師はまだ休めといったが大学生活に帰ることにした．前年度数学の単位を全くとっていないので育英資金は停止されるものと覚悟していた．所が学生課に行くと昨年度の教育学部の成績が非常によかったので育英資金は続けて受給されるということであった．これ本当に有難かった．

数学の講義は私にとっては２度目になるので割合楽であった．クラスメートの廣瀬澄君にさそわれてクラブ親学会に入会した．文化活動をするクラブであったが，小中高校生を対象とする通信添削やテストやサマースクールなどを扱うアルバイト団体であった．私は旧制高校時代から子供たちを教えることが好きだったのでこのクラブの行事に全くはまってしまった．選挙で運営委員に選ばれて毎日西部講堂横の親学会ボックスに通う身となった．サマースクールでは高校生を集めて吉田分校（旧三高校舎）の教室で数学の授業をやったのは望外の喜びであった．

３回生になって研究部長にえらばれ，同級の廣瀬君，一条君を中心とし若手の南池君，愛須君，富増君などと協同して高校の数学問題集を作った．ミネルバ書店が出版してくれたが，監修者が必要ということで，皆でおそるおそる小堀先生にお願いに行ったら，折角の企画ができなかったら可哀そうだからとにかくやってみろというご返事を頂いた．お陰で本となり先生に厚く感謝している次第である．

5．新生活（酒が恐い）

昭和29年（1954年）京都大学を卒業した．滝川総長の“ただ酒を飲むな”で有名になった祝辞の後，数学教室で秋月教授から一人一人終業証書が手渡された．後年29年卒が集まって「ふくます会」「29稀」の同期生会の語源にたったことは創刊号（同窓会設立記念号）の土川君の原稿に詳しい．

私は小堀教授の紹介で滋賀県の水口（みなくち）にある県立甲賀高校に就職した．

水口は京都に近いせいもあって，甲賀高校には京大卒の若い先生も多く，また校長はじめ年輩の先生も率直で活気のある方が多かった．生徒たちも素直で楽しい学校生活がおくれた．私たちが作った親学会の問題集も副読本として採用され嬉しかった．

１学期が終わると職員懇親旅行に参加した．北陸を訪ね芦原温泉１泊というものだった．旅館につくと懇親会が始まった．私は新任ということからか多くの先生から盃を受けた．酒は飲んだことがなかったが，注がれたら飲みほしてお返しするものと思っている中に段々と何となくあやしくなってきた．小さな盃だが次々と受けている中に量をすごしたのであろう．地面が浮き上がってくるのである．隣に坐っていた同僚がみかねて抱きあげて寝室までつれていってくれた.「だいじょうぶか !?」とやさしく介抱して寝かせてくれて後はもとの席へ帰っていった．ウトウトしていたら先程介抱してくれた友人がフラフラとなって帰ってきた．今度はこちらが介抱する羽目になった．何と酒は恐ろしいものだ !! それからしばらくは酒は一切飲まなかった.（ビールだけは飲んだ．私のビール好きはここから始まったのかも知れない）

翌日は全く元気になって東尋坊などの名所を訪れて楽しくすごしたが，折角温泉旅館に泊まって温泉にも入らず，ご馳走も食べずお酒の恐ろしさだけが身にしみて残った．

6．洛星中高等学校の生活　その１

私はひととき妙心寺の塔頭聖澤院に下宿していた．院主の稲垣仁山老師は気さくな方で佛教の話をしてくれたり時に座禅にさそってくれたりした．嵐山電車で妙心寺駅から白梅町駅まで乗ると北側の広場に「聖ヴィアトール学園用地」と書いた立て札が眼に写っていた．

当時日本は敗戦の直後で自信を失い，湯川博士のノーベル賞とフジヤマのトビウオ古橋選手の世界記録でわずかに自信を取り戻しかけた時代である．外国は新しい学校を作るなんで金持だなあと考えていた．ところが中学校が開校され，昭和30年に高等学校が開校されたとき縁あってこの学校に勤めることになった．

ヴィアトール修道会はローマに本部をおくカトリックの教育修道会であって，洛星はカナダのモンテリオールの管区が経営する学校である．したがって多くのカナダ人，アメリカ人の修道士たちが経営と教育にたずさわっていた．初代校長ホワイト神父は厳格だがユーモアのある神父さんで厳しく生徒を躾けた．静粛，整頓，礼儀正しさ，戦前の日本のよい所だけが行われているという評判をとった．洛星の生徒は後ろ姿を見るだけで洛星の生徒とわかると迄いわれるようになった．これは私の気に入った．

ナドウ訓育部長（後に２代目校長）は真面目ひとすじの神父さんだった．指導はきびしかった．音もなく授業中の教室に現れ，その手には全ての生徒の座席表が携えられていた．生徒は「エンマ」と名付けてこわがっていた．この「エンマ大王」のひたすらな指導に導かれて，生徒はすくすくと育った．その後ナドウ神父が退職日本を離れるときには多数の卒業生が集まった．そのとき何と数人の卒業生の作る肩車に乗って「閻魔大王」の衣装をつけたナドウ神父がニコヤカに現れた．ドッと歓声がわき上がった．こわかったけれど本心はしたわれていた神父さんだったのだ．同時に神父さんに捧げられた文集が作られた．その名は何と「エンマ帳」，皆の感謝の言葉があふれていた．

１期生は先輩のいない学年なのに優秀な生徒が多かった．１年の夏休みまえに小田忠雄君という生徒が，本格的に数学の勉強がしたいので本を教えて下さいといってきた.「ウーン，本気なら高木貞治先生の解析概論があるが無理だろうな」．ところが夏休みが終わったとき「先生あれ読みました」といってきたので腰をぬかさんばかりに驚いた．私自身完全には理解できたとは思っていないのに，この生徒は俺よりよくできる！彼は京大数学科を卒業して東北大学教授となり学問のかたわら広中教授と共に高校生の数学現代化講座に力を入れている．学識だけでなく性格も温厚で私が接した生徒の中で最高の人物だと思っている．

この学年で千藤先生（東大理卒），富岡先生（京大物理卒）と私と３人で担任し88人の第１回卒業生を送り出した．卒業式は校長が生徒一人一人と握手をかわして卒業

証書を渡した．生徒の歌う「蛍の光」を聞きながら担任としてホッとしたようなさみしいような，そして彼等のこれからの活躍を期待して祈るような感慨をもって彼らを見送った．

7．洛星高等学校の生活　その２　修学旅行は「ほうき」を持って

当時中高校の修学旅行はすごく評判が悪かった．やんちゃな子供たちがきちんと躾けられておらず，公共施設をこわしたり旅館であばれたり新聞などで散々悪評がたてられていた．本校では１期，２期は修学旅行はなかったが生徒の希望もあり私は４期生の担任のとき修学旅行に行くこととなった．生徒の希望は圧倒的に北海道であった．

「決して人の迷惑となるような行動をするな」「ハイわかっています」「君達がきちんと行動しないと後輩たちが受け入れてもらえなくなるぞ」「模範となるようにつとめます」あこがれの北海道！生徒と一緒に私も心がはずんだ．

所が難問が起こった．真面目なナドウ校長が８千円以下の経費で行けという．ツーリストに相談したが無理だという．校長は保護者の負担を考えなさいという．その意味はよくわかるが，生徒の希望をかなえたい．「8 千円では青森でアチラが北海道ですと眺めて帰らねばなりません」「北海道を眺めて帰ったらいいではないですか」これでは話にならない．よい手を思いついた．鉄道料金の遠距離料金逓減制度である．鈍行列車で網走まで行ってしまうのだ．ツーリストが苦心して８千円でプランをたててくれた．

京都駅集合．青森行夜行普通列車．32 時間の旅が始まる．発車ベルが鳴る．ポェー（当時は SL 機関車）列車がガクンと動き出す．駅のアナウンスが聞こえる．「つぎはーやましなー」おゝ北海道は遠い．北陸本線はトンネルが多い．冷房も扇風機もついていない真夏の車中は暑い．トンネルに入ると窓をしめなければならない．トンネルを出るとすぐ窓をあける．風と共に煤煙がとんで入る．汗と煙で服が黒くなる．夜があけると地方の人も乗ってきて，あの山は何々とか郷土弁で話しかけてくれる．よい社会勉強になる．

長距離列車のせいか進行はのどかだった．大館駅では 30 分停車で，体育委員が全員を下車させて，オイチニーと体操をさせた．駅員がそろそろ発車しますから乗車して下さいと告げてくれた．

やっと 32 時間の旅の終りが近づいた．班毎に持参してきた「ほうき」で掃除した．青森駅で下車すると駅員さんがきれいに掃除された車中を見て感心していた．青森で旅館に１泊した．旅館での生徒たちの行動は申し分なかった．旅館の人にもきちんと挨拶し，出発前に部屋を片付け掃除をしていた．「こんな立派な生徒を見たことがない．来年もおこしをお待ちしています」女将さんの言葉に生徒もそして先生もニンマリしていた．

青函連絡船に乗って函館へ（勿論まだ青函トンネルなどない）船の旅も中々よいものだ．出航の様子が見送りの人との間で何か切なく哀愁さえ感じられた．函館につく

とすぐに夜行列車で札幌へと向う．

札幌では北海道大学の広々とした構内を散策しクラーク博士の銅像の前で “Boys, be ambitious” という言葉を味わった．この大自然に包まれた北大にあこがれて北大に進学した生徒もいた．札幌で一泊したが普通の旅館だったので風呂が小さく，生徒全員に割り当てた後，教員が風呂に入れたのは午前２時であった．

翌日は又鉄道で網走へ，そしてバスに乗り換えて夢の摩周湖へ，そして阿寒湖へと向った．いずれをとっても本州と違う美しい景色ではるばる北海道へ来てよかったと思った．この日は阿寒湖温泉泊まりで楽であった．というのは風呂が大きくて，貸切にしてもらって１時間余りで全員が入浴できたからである．修学旅行は温泉がよいとつくづく思った．次の日は札幌郊外の定山渓温泉．トラピスト女子修道院を見学してゆっくり休んで青森へ．そしてあの長距離普通列車に乗車．どうなるかと心配していたが生徒も先生も疲れきっていて，車中の様子は覚えていない．食事が配られたときだけ目がさめたという感であった．無事京都について無事故であったことにホッとした．

後日ある生徒が語ったのを聞いた.「たいへんなシンドイ旅行だった．でもなつかしい．とくにあの鈍行列車のしんどさに比べれば，大学入試の勉強なんで楽なものと考えられる．いい経験をした」この学年は京都大学合格者数が京都で１位となった．

8．洛星高等学校の生活　その３

私は子供のときから学校の授業が好きだった．先生の指導に従って問題を解くのが楽しみだった．中でも数学で微積分を始めて習ったとき，こんな面白い考え方があるのかと感激した．自分が味わった数学の楽しみを生徒に与えたいと思った．なるべく解りやすく，面白く授業を進めるように心がけた．これはある程度成功したように思われる．多くの生徒が私の授業を楽しんでくれたようだし，１期生を共に教えた先生が，一番好きな教科はと生徒に聞いたら，どのクラスも「数学」と答えたといわれておどろいたが嬉しかった（この学年は数学は私一人で教えていた）

京都高等学校数学研究会の谷口会長から何か研究会で発表してくれと頼まれた．特に手持ちの資料もなかったので，私の教えた学年の生徒に数学のどの部分に興味を持ったかを項目をあげてアンケートをとってみた．その結果驚いたことに（当然のことかも知れないが）私が特に興味をもって教えた部分は生徒も興味をもち，私があまり興味を持たなかった部分は生徒も興味を示さなかった．これは私の方に反省すべき面があることを教えられた．さらに他の学年の先生に同じ調査を依頼した．全く予期せぬことであったが，私の学年のアンケート調査の結果と興味の対象が全く違う結果がでたのである．これは大変なことだと思った．一人の教師が一つの学年を引きついで持ち上がる．これは能率のよいことだ．事実生徒との個々のくせまでつかんで教師は指導がうまくできる．しかしこれは反面恐ろしいことだ．教師も生徒も個性がある．１人の教師にずっと指導されて一面的な生徒になってしまうのではないか．私はこのことから一つの学年は必ず２人の教師で教えることを主張している．

9. 洛星高等学校の生活　その４

新任早々，教務の先生からいわれた．数学の教師が足りない．数学主任何とかしてくれ.（就職したばかりで数学主任とされていた）さっそく数学教室にお願いしたら同期の土川君が講師を引き受けてくれた．新設の学校だから毎年１学年ずつ増える．したがって毎年１人ずつ専任教師が必要となる．私は小堀先生にお願いした．小堀先生から連絡があって立派な人がいるので紹介するといういことで指定された時間に数学教室に出かけた．先生は来客中でしばらく待つように云われて事務所に入った．先客があった．岡田義郎先輩との始めての出会いである．顔を合わせたときから話が合った．２人とも歌舞伎が好きだということから数学そっちのけで芝居の話になった．事務長の松谷さんがまた長唄が好きときてい話がはずんだ．小堀先生に改めて紹介して頂いて岡田先生は洛星に来て頂くこととなった．岡田先生との親しいつき合いの始まりである.（先生には現在にいたるまで，公私とも色々ご指導を受けている．そのことは後に述べる）

続いて小堀先生から優秀な先生を毎年お世話になった．池上先生，清水先生，蓮井先生などである．

毎年数学教室に行くと待遇がすごくよい．コーヒーが出ることもある．松谷さんが「ものを売りに来るのと買いにくるのとでは扱いが違うのは当然だ」といっていた．そのうち社会の景気がよくなってくると卒業生は会社から引張りだことなり,「いくら君が来てくれてもねェ」という次第となる．世の中の移り変わりが身にしみて感ずる．

新しい先生を迎えて学園は益々発展した．すぐれた生徒が集まり教師も教え甲斐があり，京都で名門校といわれるようになった．だが私には１つの不満があった．それは教材が足りないということであった．教科書だけではもの足りない．もう少し高度の問題集があれば，生徒を向上させることができるのだが．そこで岡田先生と廣瀬先生と一緒に小堀先生に相談に行った．自分達で作ってみようということになり，ある程度原稿がまとまると小堀先生の校閲を受けた．先生からはかなりきびしい指導を受けた．

小堀先生の監修で「数学基礎演習」のシリーズが中央図書出版社から発行された．この本はわりと好評で迎えられ，後に小堀先生のあの本のお陰で数学ができるようになったという人に何人か出合った．この経験は後に小堀先生が高校の数学の教科書を奥川光太郎教授，中江龍夫教授とで作られたとき，岡田先生と私も参加して執筆させて頂いたとき役に立った．

10. 小堀先生を囲む会

小堀先生に習ったことのある高校の教師を中心にして親睦会を開こうではないかとう話がでた．先生にご相談すると出席して下さるということで昭和 39 年に第１回会合をレストラン東洋亭で開いた．たしか 10 人くらい集まったと記憶している．先生のお

話のひとことひとことが懐かしかった．最後に自己紹介をする段となったら，先生が出席者全員の名前を一人ずつ紹介された．まさか自分の名前までおぼえていたゞいていたと思っていなかった．私達はこの会の名前を“小堀先生を囲む会”と名付け会員が毎年交替で幹事をつとめることにした．大河内山荘，タワーホテル，都ホテル，美濃幸等々幹事の心づくしで会が続けられた．出席者も守本教授（同志社）や吉沢欣一（大同生命社長）なども参加され，30人余りが集まったときもある．

先生が昭和48年フランスからレジョン・ドヌールを贈られたときは記念として先生の肖像写真をお送りした．また昭和60年6月29日には20回記念として有馬温泉兵衛向陽閣に一泊旅行した．皆楽しい一夜を送った．帰路神戸の海岸のホテルで昼食をとった．海がきれいに輝いてみえた.「菊の井」で先生の米寿（数え年）のお祝いをした．27回の「やまばな平八」の会が最後となった．

平成4年12月8日に先生はお亡くなりになった．告別式は12月11日南禅寺正因庵で行われた．私達は平成7年ご長男小堀乃(のぶ)氏を迎えて先生を偲ぶ会を開いた．このとき真宗の住職をしている廣瀬君が追悼のお経をあげ，先生そっくりの御長男乃をお迎えしてありし日の愛情豊かな先生の思い出にふけった．

小堀先生を囲む会　（1992年6月28日 やまばな平八）

11．小堀先生の思い出　その１

小堀先生はよく外国に行かれたときの話をされた．米国のプロフェッサーの所で食事に招待され，奥様の手料理をご馳走になったが，後片付けはご主人が全部された．ア

メリカではプロフェッサーでもそういうことをするのだねぇ．傍らで先生の奥様がこれを聞いておられ「こんな話をしても家では何もしないのですよ」と仰言ると，先生は苦笑いしておられた．

先生は有名な愛妻家で誰に会っても「奥さんお元気ですか．奥さんを大事にしなさいよ」と云われた．先生の教え子の中江教授はいつもいわれるのでこれは「さいがい（妻害）だ」などと冗談を仰言ったことがある．

先生は昭和 42 年に京都大学を退職され，乞われて京都府立大学の学長になられた．学園紛争の荒れた頃で，学校は学生によって学園封鎖されていた．先生は学生から離れてはいけないと仰言って教授会も隠れてはせず，学生との話し合いにも応じられた．先生の就任と共に学園封鎖はすぐに解けて学園は正常化した．

昭和 49 年 4 月 25 日に奥様がお亡くなりになった．先生の嘆きは如何ばかりだったでしょう．

先生は「亡妻の二度目の盂蘭盆を迎えて」と題して亡き奥様の思い出を書いておられる.「私が彼女と始めて出合ったのは昭和 3 年 5 月 25 日である．彼女は 18 歳であった．が和服がよく似合い，理知的なまなざしからこぼれる笑顔が何ともいえない魅力を発散していた．このときから数えて，46 年つづいたのであるが，その間に子供が 6 人もできたけれども彼女の私への心差しは全く変ることはなかった．

私は自分で服を着ることはなかった．ネクタイも自分でしめたことはない．靴下もはかせてもらった．玄関で靴をはかせてくれてから，寄り添い，胸のハンカチを整えてくれ,『行ってらっしゃい』と送りだしてくれた」

先生は奥様の胸像の製作を依頼され，出来上がるとお庭の池のほとりに安置され奥様の名前をとって “文子の庭” と名付けられた．

12．小堀先生の思い出　その２

小堀先生はパリの大学で日本の数学史の講義をされた．“Les étapes historiques au Japon” と題するテキストを A mon elève Morizumi en hommage reconnaisant Kobori というサイン入りで頂いた．中国から伝来したときから始まって関孝和の業績から現代に至るまでの日本の数学の歴史が簡潔にまとめられていた．そのときのことであろうか，先生から面白い話をきいた．パリの大学の教授達との懇親会で先生は日本の算盤をみせてこれは計算が早く正確にできる道具であると話された．フランスの教授がほんとうか，ではこの中で一番暗算の得意な教授と競争してみろということになった．ヨーイ，ドンで始まったこの競争 ―日本人なら誰でも想像できるが― 問題にならなかった．皆びっくりしてその算盤を大学に寄付してくれということになった．かくして日本の小さな算盤はパリ大学の備品となったという．

語学の達者な先生はヨーロッパの各国の大学を訪ねられた．ベルリン大学を訪ねたときのお話を伺った．ベルリンの壁がこわされる前の話である．

まだ冷戦中である．ベルリンを訪れた先生は大学を訪ねようと思われた．地下鉄で

ウンター・リンデン駅下車すぐ近くのフンボルト大学で学長と懇談することができた．その帰り道である．カメラ片手に町を眺めながらブラブラと歩いていると，突然警官らしい人が「Halt!（止れ！）」という.「ここから先は西ドイツだ！」（そうするとここは？）そういえばあたりの景色も粗末な建物が多く，店の品物も少なく，看板にも浪費は敵だなどと書いてある．そうだベルリン大学は東地区にあったのだ．はじめて気が付いた先生はその警官に「日本から来た学者だが，ベルリン大学に用があってここへ来たので，西へ帰りたいが，君のような人が立っていない場所はないか」ときいたらそんなことは教えられないという返事．ではどうしたらいいのかというと「地下鉄は通っている」ということ．やれやれと思って地下鉄ウンター・リンデンえきについてほっとする．

切符売り場でお金を差し出すと「Falsch! これは西のお金だ，使えない」勿論東の貨幣を持っていない先生は途方にくれた．段々と夕闇が近づいて落ち着かなくなる．退社どきの人の群があわただしくなってくる．そこで先生は群衆の中のインテリらしき若者を捕まえて “かくかくしかじかで西へ帰れなくなって困っている．すまないが切符の代金を貸してもらえんか．東のマルクは持っていないので返すことはできないが，西へ行ったらコーヒーをおごるから” ということで無事に西へ帰られたということである．

13. 洛星時代　その５

私は平成 4 年 3 月の定年退職まで 37 年間洛星でお世話になった．今になって一番感謝していることは，6 代目までの校長は 5 代目村田神父を除いて全員始めて日本に訪れ日本語も初めて習って，日本の若者の教育のために一生を捧げられたということである．その村田神父でさえ 10 代でカナダの神学校に入学し，戦後日本に来たとき「私は村田と申されます」といって「神父さん，外国生活が長かったんだね」といわれたと自分で仰言っていた．当初の土地，校舎の建築はもとより，英語教師その他多数の修道者の経費も全部本部の修道会が受けもっていた（現在は外国からの経済的援助は受けていない）．まだある，会計を受け持ったブラザーオーベンが節約してください，チョークや試験用紙もなるべく倹約して下さいと頼んでいた．何か必要ができて会計に相談に行くと「カナダに雪が降る迄待って下さい」といわれた．何のことかわからなかった．雪の季節になってやっとその意味がわかった．カナダの学校の生徒が雪かきをしてその代金を送ってくれるのだそうだ．頭が下がった．当時敗戦直後の日本は貧しかった．今では保護者会が主催してバザーをしているが，収益をハイチなど外国の貧しい学校におくっている．僕達は皆仲間なのだ．

神父さんたちは皆日本びいき，ライスのごはんすき，日本酒すき，さしみ大好き．外人なのに日本で墓地まで作っている．副校長職は聖職者か有能な信者の先生が勤めていたが，昭和 57 年突然当時の理事長アラール神父に呼ばれて副校長をやってくれと頼まれた．私はカトリックの信者でもなく，管理職より生徒と一緒に過ごす方が好き

だったが，ぜひにと頼まれて平成4年3月停年退職まで10年間副校長の職についた．数学の授業とクラブ活動の顧問は続けた．この間多少の苦労もあったが大過なく過ごし，最後の職員会議で「今日が最後の職員会議です」といったら，皆が思わず拍手してくれた．

副校長になって昭和59年に理事長奥本祐昭先生（三高，京大農卒）と小堀先生に学園の理事になっていただけないかとお願いに行った．先生は「君たちに頼まれたら仕方ないな」といって引き受けて頂いた．毎月1回の理事会では先生から色々のご指導を頂いた．所があるとき会が終わったとき先生はポツンと云われた.「私はこれから家へ帰ってご飯を作るのだよ」先生は奥様をなくされて一人住まいだった.「ではご一緒に食事しましょう」．そのときから毎回理事会の後で食事におさそいした．ある時先生は云われた.「私は食事のときそれが美味しいかどうかで自分の健康状態がわかるのだよ」「では今日はいかがですか」「君と一緒のときはいつもおいしんだよ」この言葉が私には忘れられない．

洛星のクラブ活動も忘れられない．学校初期の昭和33年から44年まで小西先生に鍛えられたハンドボール部は12年間に8回京都代表となり，全国大会に出場した．
西野先生の指導の下野球部は51回選手権大会に初出場後，84回大会までにベスト4を3回，ベスト8を8回という成績を収めている．特に好投手今西を擁した年は優勝候補の掛け声も高く，NHKの事前取材もあったが，強豪校平安には勝ったものの，準決勝で敗れ残念だった．なお今西投手は東大に進学し同校野球部を70連敗でストップし勝利投手となった．水泳部も宮崎先生が着任されてから梶谷選手がインターハイ200m自由形で優勝，その年の国体で100m，400mで優勝している．その他にも剣道部，柔道部，弓道部，サッカー部，バレーボール部，バドミントン部，テニス部などが活躍している．文化部で最も多人数なのはオーケストラ部である．昭和32年小笠原先生の赴任，アラール神父の援助のもとで発展し，昭和50年大阪フェスティバル開幕演奏に出演し，ワイゼンベルク氏が絶賛したことが有名である．なおその時出演した生徒たちが使った部屋をきれいに掃除したという新聞記事が目を引いた．テレビの「オーケストラがやってきた」「題名のない音楽会」にも出演した．卒業しても音楽を続ける生徒も多く京大オーケストラに多数在籍し，コンサートマスターを勤めた者も多数いる．プロの佐々木真君（京大理卒，フルート）や岡田暁生京大教授のような専門家も多数いる．外国人が経営している学校なのに純日本的なクラブが2つある．謡曲部と茶道部である．人間国宝の豊島彌佐衛門氏の子息三千春君が一期生にいた関係で金剛流の謡曲，仕舞を稽古し，舞囃子から能まで演ずる高校では珍しいクラブとなった．吉村先生の熱心な指導で「うたいって何？」といっている中学生に「とにかく一緒に皆とやってみて」と“うたいずき”の生徒を作りあげた．卒業してからも三千春君が主催する「豊春会」の一門として能楽を演じている多数のメンバーがいる．学校の建物の中にお茶室がある．加地先生が顧問として表千家流の茶道を指導されている．学校の色々の行事に生

徒たちがお手前を披露している．また新校舎のお茶室の建設にあたっては7期生の武者小路千家の家元の千宗屋宗匠にお世話になった．同氏主催のお茶会が洛星の同窓会で度々開かれている．文化部では外に演劇部，生物部，囲碁将棋部，炊事部などがある．よくまあこんな沢山のクラブがそれぞれ活躍したものだ．

毎年9月になると学校中に歌声があふれる．文化祭のクラス対抗の合唱コンクールのためだ．どのクラスにもオーケストラ部のメンバーがいる．本格的な4部合唱をどのクラスも練習して発表する．文化祭はクラブやクラスの展示，演劇，音楽，模擬店などがあるが，なんといっても閉会式の合唱コンクールの成績発表が山場となる．全員参加で歌の上手なものも上手くないものも必死の練習の結果だからである．

続いて体育祭が行われる．スポーツの得意な生徒が活躍するのは当然であるが，学年を通じたクラス対抗の応援合戦が見ものである．各クラスの応援台の後には大きな背景の絵が見ものである．各クラス趣向をこらした演技もあり，三三七拍子の応援も見事である．文化祭，体育祭と続くがおのおの得意な部門で一生懸命となっているのがうれしい．中には設定から後片付けまでフラフラになる迄働いて勉強する暇があるんだろうかと思う生徒がいるが，そういう生徒に限って成績がよい．不思議なことだ．

12月の末ともなればクリスマスに“タブロー”（活人画）というキリストの生誕劇をする．12月の定期考査が終わって2週間ほどで準備しなければならないので生徒も先生も大変だ．中1の生徒が全員ローソクに火をつけて大講堂に入場し，聖書の朗読とともに受胎告知，天使と羊飼，三博士，ご降誕と朗読と合唱の中で舞台は進んでゆく．上級生も下級生も一緒になって作りあげる創造の喜びがある．無事終了して幕が下りると参加した生徒一同が舞台で抱き合って喜んでいる．感激の一こまである．洛星のタブローは京都で有名になった．

14．思い出いろいろ

洛星を停年退職してヴィアトール学園常任理事の役についた．また乞われて大阪清凌中学高等学校の校長となった．双方の理事長の了解のもとである．清凌は野球で名高い浪商学園の男子進学校として高槻市に設立された若い学校である．生徒たちは素朴で先生方も熱心な方が多かった．私は中1と高3の授業を受け持った．“楽しい学校”をモットーとして学校を運営した．高槻ロータリーにも入会し，ローターアクトなどの教育活動にも参加した．清凌を退職したとき中学生たちが「センセーイどこへ行くの，マタオシエテー」と口々に叫んでくれたことが忘れられない．

その他にも学校で教えたことはあるが最後は蓮井先生のお誘いを受けて京都産業大学の講義を受け持った．学生は非常におとなしいので，わかっているかと思いレポートを書かせたら理解している生徒が大部分であった．また最後に感想分を書かせたら多くの生徒が「先生の授業は面白かった」という．面白かったらもっとのってくれたらと思ったが，最初にキチンと講義を聞きなさいといったのがきゝすぎたのかと反省している．

若い頃病気をしたからか，人生の大部分は大きな病もせず楽しく暮らせた．大きな波にもてあそばれたり小さな波にたわむれたり色々あったがまず人生とはこんなものだろう．

人々から若く見えますねといわれていつ迄も元気のつもりであったが米寿を過ぎると少々あやしくなった．そういえば敬愛する小堀先生も謡と舞の師匠の杉浦友雪先生も八十八さいでなくなられた．歩くのが好きだった私が歩くのに困難を感ずるようになったのである．教え子の医師に相談するとみんな手術をした方がよいという．簡単な手術ですといわれて入院したが退院まで3ヶ月かかった．医師も看護師も皆大変親切であったが，手術後あとはリハビリだけですという．現在も週2回リハビリを病院でうけているが中々思うようには歩けない．家でじっとしているとケネディ大統領の名演説 “Ask not what your country can do for you, ask what you can do for your country.” を思い出す．ところが国家に何ができるどころでなく，世の中の人に世話になるばかりで人のためになるようなことは何1つできない．おばすて山でなくおぢすて山でも探そうか! だが私には幸いにして多くの教え子がいる．毎月のように色々の学年やらクラブから招待される．自分自身さして立派な先生とは思っていないが，皆が顔をみせただけで喜んでくれる ―うれしい．

“Les jeux sont aveugles. Il faut chercher avec coeur!”

「大事なことは目ではなく，心で探すのだ！」（星の王子さま）

この度は井川満名誉教授から同窓会への寄稿を依頼された．ありがたいことだ．せめてミミズのつぶやきくらいのことが書けたらと思っている．私事で恐懼だが，現在のところ息子憲一と娘由紀子そして家内道子にすべて世話になっている．なにもしてやっていないのに申し訳なく思っている．

2019年（令和元年）6月

森住　弘